

源利用を旨とし、一つくり方からつくりなおす「活動を始めるといふ」。

しかし現状では再利用が
できない部材が多く、住宅
解体時には廃棄せざるを得
ないエコノミーへの転換を図

積水ハウスは、住宅を構

成する約3万点の部材を再検討し、それらを廃棄物ではなく資源として循環させる設計方針を掲げている。

この方針は、設計段階からリサイクルやリユースを前

提としたものであり、住宅業界では初の包括的な挑戦といえる。

改修・解体時に発生する廃

棄物は、全国21カ所に設置された「資源循環センター」

3年度には約3万7千トが
100%再資源化された。

さらに、ブリヂストンや大建工業といったサプライ

ヤー企業、東京大学の清家剛教授らと連携し、リサイクル可能な部材の開発や共同研究も積極的に進めている。こうした産学協働の体制により、技術的・運用的な課題に対応できる点が大きな強みである。

3・7万トンを1000

は、持続可能な社会の実現に向けた具体的かつ先進的なモデルであるといえる。

【教員の展開】
（浜島裕美教授）
積水ハウスは（

2024年

積水ハウスの取り組みは、建材をリサイクル・リユースし、環境への配慮がなされている点が優れている。

12月4日に、サーキュラーエコノミーへの移行を目指す、住宅部材のリサイクルやリユースを進める「循環

記者会見で「非常に難しいプロジェクトで、自社だけで実現できるものではない」と語ったところ。

2030年にはZEH水

3・7万トンを100%再資源化

積水ハウス、連携体制で一層推進

この取り組みは、単なるリサイクルに

とどまらず、「住宅の長寿

る。全国に回収拠点があり、する家（House to

「ラーエコノミー研究所」が金が必要となろう。その間、

命」 「自然資本の持続可 解体時の廃材も無駄にせず
能な利用」 「部材・原材料 再利用できる仕組みが整つ

House」プロジェクトを始める」と発表した。

開設される。また今年9月 新素材が開発される可能性には千葉県幕張メッセで第 もある。

の循環利用」という3つの観点を柱とする「サーキュラーデザインプロジェクト」の一環として推進されている。積水ハウスの活動できると感じた。

2050年までに、3万点 5回サーキュレーエコノミ House to House
以上からなる家の部材を見 EXPO秋が開催され、 useは魅力的な響きだ、
直し、リサイクルやリユ 約500社が出展する。サ が、もつと業界全体を巻き
への部材だけで構成した家 ーキュレーエコノミー型経 込むよつな潮流が生まれる
くりとその持続可能な資 営に移行したくとも自社開 ことが望まれる。